

## 列王記第二 19 – 21 章 「ヒゼキヤの祈り」

### 1 A 敵からの救い 19

1 B 苦悩の祈り 1 – 19

1 C 主の御業の始まり 1 – 7

2 C 執拗な脅迫 8 – 19

2 B 主の答え 20 – 37

1 C アッシリヤ王に向けて 20 – 28

2 C ヒゼキヤに向けて 29 – 37

### 2 A 命の延長 20

1 B 大声の泣き声 1 – 11

1 C 家の整理 1 – 7

2 C 神のしるし 8 – 11

2 B バビロン捕囚 12 – 21

### 3 A 滅びの定め 21

1 B 先住民より悪い業 1 – 18

1 C 宮の中への持込 1 – 9

2 C 北イスラエルの道 10 – 18

2 B 繰り返す子 19 – 26

## 本文

列王記第二 19 章からです。私たちは前回、アッシリヤがユダの町々を攻め取り、エルサレムを包囲して、ヒゼキヤを脅したところまで読みました。その続きです。

### 1 A 敵からの救い 19

1 B 苦悩の祈り 1 – 19

1 C 主の御業の始まり 1 – 7

19:1 ヒゼキヤ王は、これを聞いて、自分の衣を裂き、荒布を身にまとして、主の宮にはいった。19:2 彼は、宮内長官エルヤキム、書記シェブナ、年長の祭司たちに、荒布をまといせて、アモツの子、預言者イザヤのところに遣わした。19:3 彼らはイザヤに言った。「ヒゼキヤはこう言っておられます。『きょうは、苦難と、懲らしめと、侮辱の日です。子どもが生まれようとするのに、それを産み出す力がないのです。19:4 おそらく、あなたの神、主は、ラブ・シャケのすべてのことばを聞かれたことでしょう。彼の主君、アッシリヤの王が、生ける神をそしるために彼を遣わしたのです。あなたの神、主は、その聞かれたことばを責められますが、あなたはまだいる残りの者の

ため、祈りをささげてください。』」

ヒゼキヤ王は主の宮に入っています。これが彼の特徴です。ラブ・シャケの脅しを、三人の側近から聞いて、これを初めに行いました。衣を裂いたり、荒布を身にまとうのは、嘆きや悲しみを示す身振りです。彼は、主のところに行って嘆きました。前回の学びを思い起こしてください、私たち信仰者は霊の戦いの中にいます。私たちの肉の弱さに付け込んで猛烈に攻撃し、何とかして主に信頼するのをやめさせようとしています。けれども、そこで大事なものは祈りをもって主のところに行くことです。

そして祈りの他に、ヒゼキヤにはもう一つの良い特徴がありました。それは神の言葉を聞く、ということです。彼は預言者イザヤのところの人に人を遣わしました。主が今語られていることを聞くことを彼は優先したのです。側近にも神の言葉が今、聞き入れるべき言葉、指導を受けるべき言葉として聞いてもらいたかったので側近をイザヤのところの人に遣わしました。私たちが苦境に陥った時に、他の兄弟姉妹に何を頼むでしょうか？ 祈りを頼むことはとても素晴らしいことです。一人で悩むのではなく、分かち合って祈ってもらうのです。もう一つの大切なのは、神は今の状況をどう見ておられるのか、神は何を御心としておられるのかを聞くことです。信仰的に成熟していて、神のみ言葉を知っている兄弟姉妹にこのような状況の時に主の御心が何なのか、尋ねてみるとよいのです。聖書から語ってもらいます。

ヒゼキヤの発言に、その苦悩がひどく上手に表れています。母の産道に子がいるのに、出てこないという痛みです。私はもちろん、まだ子を産んだことのない女性も理解できないでしょうが、子が与えられた方はこの痛みをよくご存じでしょう。あれが一時的なものだから耐えられるのであって、産み出す力がなくなり産道に赤ん坊が留まっていたらどれほどの苦しみでしょうか！ 彼らは力尽きました。自分たちができることはすべて行いました。エジプトへの援軍要請は失敗に終わりました。そして城壁の強化、また地下水道の建設も行いました。それでも、今、エルサレムがアッシリアの前で陥落しようとしているのです。

ヒゼキヤは正しい見方をしています。ラブ・シャケの言ったことは主がすでに聞かれていることだ、と言っています。私たちは祈りを、まるで主が知らないかのように報告するように話したりしますが、その必要はありません。そして、生ける神をそしている、と言っています。ヒゼキヤはひどく傷つきましたが、それでもこれは主ご自身に対する毀損であるとみなしていました。そして、それが正しいのです。彼は主の宮の中に入って、ここまでの正しい姿勢、また正しい見方を持つことができました。祈りを通して神の臨在の中に入ることが、いかに大切かが分かります。

19:5 ヒゼキヤ王の家来たちがイザヤのもとに来たとき、19:6 イザヤは彼らに言った。「あなたがたの主君にこう言いなさい。主はこう仰せられる。『あなたが聞いたあのことは、アッシリアの王の若い者たちがわたしを冒涇したあのことを恐れるな。19:7 今、わたしは彼のうちに一つの霊を入れる。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしは、その国で彼を剣で倒す。』」

主がヒゼキヤの願いをすぐに聞いてくださいました。励ましを与えておられます。まず、彼らの言った言葉を恐れるな、と言われていました。箴言にあります、とても大切な真理です。「人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。(箴言 29:25)」そして、「彼のうちに一つの霊を入れる」と言われています。私たちは人の動きを、自分たちの作為や説得で影響を与えることができていると思っています。いいえ、主が霊によって人々を動かしておられるのです。

## 2 C 執拗な脅迫 8 - 19

19:8 ラブ・シャケは退いて、リブナを攻めていたアッシリアの王と落ち合った。王がラキシユから移動したことを聞いたからである。

リブナは、ラキシユから数キロ北にある町です。セナケリブはラキシユからラブ・シャケを送っていましたが、セナケリブがその間にリブナに移って攻め取っていました。

19:9 王は、クシュの王ティルハカについて、「今、彼はあなたと戦うために出て来ている。」ということを知ったとき、再び使者たちをヒゼキヤに送って言った。

クシュすなわちエチオピアの王ティルハカが攻めてきた、とあります。エチオピアについては、イザヤ書 18 章で主がその国に預言を与えています。この国は今のエチオピアよりも大きく、今のスーダンも含んでいました。そして、ヒゼキヤが王の時は、エチオピアの王がエジプトのパロになっており勢力を増していたのです。

19:10 「ユダの王ヒゼキヤにこう伝えよ、『おまえの信頼するおまえの神にごまかされるな。おまえは、エルサレムはアッシリアの王の手に渡されないと断言している。19:11 おまえは、アッシリアの王たちがすべての国々にしたこと、それらを絶滅させたことを知っている。それでも、おまえは救い出されるというのか。19:12 私の先祖たちはゴザン、カラン、レツエフ、および、テラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々は彼らを救い出したのか。19:13 ハマテの王、アルパデの王、セファルワイムの町の王、また、ヘナヤイワの王は、どこにいるか。』」

王の手紙には、彼の焦りが感じ取れますね。ちょうど黙示録で、患難期の半ばに悪魔が空中から追い出され、地上に落ちてきて、最後のあがきを始めるのに少し似ていると思います。そして、この手紙の言葉はヒゼキヤをさらに落ち込ませるのに十分でした。

19:14 ヒゼキヤは、使者の手からその手紙を受け取り、それを読み、主の宮に上って行って、それを主の前に広げた。19:15 ヒゼキヤは主の前で祈って言った。「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、主よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。19:16 主よ。御耳を傾けて聞いてください。主よ。御目を開いてご覧ください。生ける神をそしめるために言ってよこしたセナケリブのこぼしを聞いてください。19:17 主よ。アッシリアの王たちが、国々と、その国土とを廃墟としたのは事実です。19:18 彼らは

その神々を火に投げ込みました。それらは神ではなく、人の手の細工、木や石にすぎなかったので、滅ぼすことができたのです。19:19 私たちの神、主よ。どうか今、私たちを彼の手から救ってください。そうすれば、地のすべての王国は、主よ、あなただけが神であることを知しましょう。」

午前礼拝で話しましたように、祈りを始める時に、祈っている相手がどなたかをはっきりと言葉で言い表しています。まず、「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神」です。これは、主がモーセに現れてくださり、シナイ山において、神の幕屋の契約の箱、その上の贖いの蓋のケルビムを思い起こさせています。ケルビムは、主の御座のすぐそばにいて神を礼拝している天使長です。そして、「あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。」と言っています。この真理だけで十分でした。ある国はこの神様がいて、また別の国には他の神様がいて、すべての王国の神がこのイスラエルの神なのです。私たち主、イエス・キリストの神も同じです。天地創造の神、主イエス・キリストは、アメリカ人の神ではなく、日本人の神でもあります。その理由が、「天地を造られた」ということです。アメリカ人であれ、日本人であれ、人であれば息をするのと同じように、天地創造の神はすべての人の主であります。

そこで、ヒゼキヤはアッシリヤからの救いを願っています。そしてこのことによって、主がすべての王国の神であることを知るでしょう、と祈っています。どうか、祈りに大胆になってください。主の栄光のため、主の御名が高く上げられるための祈りであれば、大胆になるべきです。

## 2 B 主の答え 20 - 37

### 1 C アッシリヤ王に向けて 20 - 28

19:20 アモツの子イザヤはヒゼキヤのところの人にやってみせた。「イスラエルの神、主は、こう仰せられます。『あなたがアッシリヤの王セナケリブについて、わたしに祈ったことを、わたしは聞いた。』19:21 主が彼について語られたことは次のとおりである。処女であるシオンの娘はあなたをさげすみ、あなたをあざける。エルサレムの娘はあなたのうしろで、頭を振る。19:22 あなたはだれをそしり、ののしったのか。だれに向かって声をあげ、高慢な目を上げたのか。イスラエルの聖なる方に対してだ。19:23 あなたは使者たちを使って、主をそしって言った。『多くの戦車を率いて、私は山々の頂に、レバノンの奥深く上って行った。そのそびえる杉の木と美しいもみの木を切り倒し、私はその果ての宿り場、木の茂った園にまでは行って行った。19:24 私は井戸を掘って、他国の水を飲み、足の裏でエジプトのすべての川を干上がらせた。』と。19:25 あなたは聞かなかったのか。昔から、それをわたしがなし、大昔から、それをわたしが計画し、今、それを果たしたことを。それであなたは城壁のある町々を荒らして廃墟の石くれの山としたのだ。19:26 その住民はかうせ、おののいて、恥を見、野の草や青葉、育つ前に干からびる屋根の草ようになった。

主ご自身がセナケリブに返信の手紙を書いております。ヒゼキヤが自分でセナケリブから守られるのではなく、主がヒゼキヤをセナケリブから守ってくださいます。私たちが自己擁護をすれば、主はそれを許されます。自分で守らなければいけません。けれども主に擁護をゆだねれば、主が守ってくださいます。

初めに、21 節は、エルサレムの娘があざけている姿から始まりますが、これはちょうど娘を強姦しようとしている男のたとえがその背景にありそうです。その試みが見事に失敗して、娘が男を嘲笑っているという比喻であります。そして、「だれに声をあげているのか、イスラエルの聖なる方に対してだ。」とされています。これは大事な視点です。キリスト者に対して、キリストへの献身を人がそしる時に、それはその人を責めているのではなく、キリストご自身を責めているのです。

そしてアッシリヤがこれまでの軍事的勝利を誇って、おごり高ぶっていますが、大事ですね、「昔から、それをわたしがなし、大昔から、それをわたしが計画し、今、それを果たしたことを。」と主が言われています。これが神の主権であり、神の永遠性です。この世で起こっているすべてのこと、特に主権や力に関するすべてのことは、主が世の初めからすべてを知っておられ、それを計画し、そして実行に移しておられる、ということです。「それでは、罪や悪も神が引き起こしているのか？」と言われるかもしれませんが、そうではありません、罪や悪でさえも神は用いられて、ご自分の目的や栄光のために働かせる、という意味です。

大事なのは、神をあがめているかどうか、なのです。自然界に、そして人のあらゆるあり方や営みに神がおられます。この神を神としているか、ということでもあります。これが人の罪の根源です。すべては神から来ているのに、この方を認めずに、自分の思いをむなしくして、自分を賢いとみなしている、これが罪の根本であります。私は日本の人たちに伝道するときに、「このすべてを支配して、動かしておられる神を無視することそのものが、聖書では罪と言っています。」と、罪についての定義をはっきりさせます。

19:27 あなたがすわるのも、出て行くのも、はいるのも、わたしは知っている。あなたがわたしに向かっていきりたつのも。19:28 あなたがわたしに向かっていきりたち、あなたの高ぶりが、わたしの耳に届いたので、あなたの鼻には鉤輪を、あなたの口にはくつわをはめ、あなたを、もと来た道に引き戻そう。

この真理もとても大事です。主はすべてのことを知っておられます。座るのも、出ていくのも、入るのも知っておられます。「主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。（詩篇 139:1-4）」

最近、スノーデンという元 CIA の職員がアメリカの監視網を暴露して、大きな話題になっていますが、このことの前に日本ではエシュロンという盗聴網が、電話通話、Eメールなどの通信のすべてを盗聴、傍受していると言われていました。プライバシーがない、という声が大きくなりましたが、私は Eメールや SNS などの便利な通信手段、また個人情報の電子化ができた時点で、私たちの社会は基本的に監視されていると考えたほうが良いと思っていました。けれども、クリスチャンはもっとも大事な真理を抱いていないといけません。人はすべての一言、心の思いが、すべてが主なる神に見られて、聞かれているということです。もちろん、主なる神と和解し

て、キリストとの関係を持っている人は、その見られていること、聞かれていることが好意をもって行ってくださっている、私たちのことを思いやってくださっているのですが、それでも、見られて、聞かれているという真理をしらなければいけません。

そして主は、ご自分の全知の能力にしたがって、セナケリブに報いを与えられます。鼻に鉤輪を、口にくつわをはめる、というのは、アッシリヤが捕囚の民を連れていくときに行っていたことです。同じ仕打ちを受けるように帰国させると言われています。自分が蒔いた種をそのまま刈り取ります。

## 2 C ヒゼキヤに向けて 29 - 37

そして今度は、ヒゼキヤに向けて語られます。

19:29 あなたへのしるしは次のとおりである。ことしは、落ち穂から生えたものを食べ、二年目も、またそれから生えたものを食べ、三年目は、種を蒔いて刈り入れ、ぶどう畑を作ってその実を食べる。19:30 ユダの家ののがれて残った者は下に根を張り、上に実を結ぶ。19:31 エルサレムから、残りの者が出て来、シオンの山から、のがれた者が出て来るからである。万軍の主の熱心がこれをする。

これは、ユダの地がアッシリヤによって荒らされて、農作をするのに初めからやり直さなければいけない姿を表しています。そして、エルサレムが包囲されて、ずっと閉じ込められていて、トラウマが残っている姿を描いています。たとえ荒らされていて、実質的な収穫が三年目にならないと得られなくとも、その間、落ち穂から生えられたものを食べることができる、と約束してくださっています。そして、エルサレムから出てくるのは残りの者である、と言われています。残りの者、というのが、イザヤ書の頻繁に出てくる言葉であり、大勢が主に背いているけれども、それでも主を神としてあがめている一部のイスラエル人のことを指しています。

19:32 それゆえ、アッシリヤの王について、主はこう仰せられる。彼はこの町に侵入しない。また、ここに矢を放たず、これに盾をもって迫らず、塁を築いてこれを攻めることもない。19:33 彼はもと来た道から引き返し、この町には、はいらない。・・主の御告げだ・・19:34 わたしはこの町を守って、これを救おう。わたしのために、わたしのしもべダビデのために。」

主は明確に、エルサレムにはアッシリヤは入らないと確約しておられます。そして、大事なのは誰のために主が彼らを救われるのか？ということです。主ご自身のため、そしてダビデのためです。これは大事な点です。イザヤ書を読めばはっきり分かりますが、彼らが正しい行いをして、彼らが変わられたから救われるのではなく、イスラエルをご自分の民として神が、ご自分の榮譽にかけて救われるのです。彼らの行いではなく、一方的な神の恵みによって救われるのです。そしてダビデのため、というのも大事です。ダビデはキリストの型です。私たちが救われるのは、私たちが何か良いことを行なったからではなく、キリストが良いことを行なってくださって、キリストの功

徳によって私たちは神の前で義と認められます。

19:35 その夜、主の使いが出て行って、アッシリアの陣営で、十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな、死体となっていた。19:36 アッシリアの王セナケリブは立ち去り、帰ってニネベに住んだ。19:37 彼がその神ニスロクの宮で拝んでいたとき、その子のアデラメルクとサルエツエルは、剣で彼を打ち殺し、アララテの地へのがれた。それで彼の子エサル・ハドンが代わって王となった。

主の使いによって、なんと十八万五千人が一度に倒れました。死体が転がっています。イザヤ書には、この出来事が、終わりの日の神の救いの原型となっています。ハルマゲドンの戦いで世界中の軍隊がイスラエルとエルサレムに攻めてきますが、主イエスが口からの剣で彼らを打ち滅ぼし、神の大宴会が開かれます。猛禽が来て、その積み上がった死体を食べるのです。

そして、セナケリブは紀元前 681 年に、ここに書かれているように二人の息子に殺されています。エルサレムの神を他の神々と同列にしたのですが、彼自身がアッシリアの神の宮で礼拝している時に殺されています。イスラエルの神はこのような形で、セナケリブに対して彼の言葉に対する答えとして、このような死なせ方をしました。

## **2 A 命の延長 20**

そして次の章も、ヒゼキヤの祈りが中心になっています。けれども、異なる形の祈りです。

### **1 B 大声の泣き声 1 - 11**

#### **1 C 家の整理 1 - 7**

20:1 そのころ、ヒゼキヤは病気になるまで死にかかっていた。そこへ、アモツの子、預言者イザヤが来て、彼に言った。「主はこう仰せられます。『あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない。』」20:2 そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて、主に祈って、言った。20:3 「ああ、主よ。どうか思い出してください。私が、まことを尽くし、全き心をもって、あなたの御前に歩み、あなたがよいと見られることを行なってきたことを。」こうして、ヒゼキヤは大声で泣いた。

なんと、ヒゼキヤが死ななければいけないという宣告を受けます。彼はこの時に約 40 歳です。まだ嫡子が与えられていない時でした。しかも、時は、エルサレムがまだ包囲されているであろう時です。なぜなら 6 節で、エルサレムを守るという神の約束がこれからの出来事として主が仰っているからです。

「あなたの家を整理せよ」という言葉を、少し思いめぐらしたいと思います。これは、相続であるとか遺書であるとか、自分が死んだ後のことを整理しなさいという意味です。私たちがこの備えができていないか？ということですよ。「いや、まだそんな歳ではない。」と思うかもしれませんが、ヒゼキヤも同じでした。いつ死ぬか分からないの

です。そして解決していない人間関係があるかもしれません。相手に傷を与えたまま、相手が死んでしまったら私たちは一生後悔してしまうかもしれません。いつ死んでもおかしくないように用意をすることは大切です。

けれどもそれ以上に、霊的な家の整理ができているかどうか、であります。自分がいつ死んでも、大胆に主の御前に出られるのかどうか、という備えです。この備えができているのは、自分がもうキリストにあって死んだ、と分かっている人です。私が好きな戦争映画があるのですが、そこで上司が部下に、「自分が生きようとする気力を失った時に、初めて兵士としての機能を果たす。」という厳しい言葉をかけている場面があります。けれども、霊的にはそうなのです。一度、自分の人生に対して死んだのだとみなしている者だけが、本当に意味で生きることができるのです。なぜなら、この世の命ではなく、永遠の命の視点から今、何をしなければいけないかを決めることができるからです。

ところで、ヒゼキヤはひどく泣きました。壁に向かって泣いている、とありますが、いつもは主の宮にいたヒゼキヤも病床から出ていくことができなかつたのでしょうか。また、皮膚病か何かを患って、儀式的に汚れていたのかもしれません。そして生きながらえることを願いました。

20:4 イザヤがまだ中庭を出ないうちに、次のような主のことばが彼にあった。20:5 「引き返して、わたしの民の君主ヒゼキヤに告げよ。あなたの父ダビデの神、主は、こう仰せられる。『わたしはあなたの祈りを聞いた。あなたの涙も見た。見よ。わたしはあなたをいやす。三日目には、あなたは主の宮に上る。20:6 わたしは、あなたの寿命にもう十五年を加えよう。わたしはアッシリヤの王の手から、あなたとこの町を救い出し、わたしのために、また、わたしのしもべダビデのためにこの町を守る。』」20:7 イザヤが、「干しいちじくをひとかたまり、持って来なさい。」と命じたので、人々はそれを持って来て、腫物に当てた。すると、彼は直った。

なんという、すばやい祈りの答えでしょうか？彼が主の宮で時間をいつも過ごしている、その親しい交わりが、この祈りの答えに反映しています。そして、癒される時に干しいちじくを持ってきなさいと言っていますが、これまで私たちは、人が癒される時にいろいろな方法が使われていたのを見てきました。シュネムの女の男の子をエリシャが治す時に、うつぶせになって口と口をつけ、目と目をつけ、それで治しました。方法はいろいろなのです。共通している大事なことは、方法はどうであれ、具体的な癒しを行なうための接点になるような行動があり、その行動に移す中で神が働いておられるということです。信じていることを、具体的な行動の中で表すときに、主がその信仰を通して癒しを行なってくださいます。

## 2 C 神のしるし 8 - 1 1

20:8 ヒゼキヤはイザヤに言った。「主が私をいやしてくださり、私が三日目に主の宮に上れるしるしは何ですか。」20:9 イザヤは言った。「これがあなたへの主からのしるしです。主は約束されたことを成就されます。影が十度進むか、十度戻るかです。」20:10 ヒゼキヤは答えた。「影が十度伸びるのは容易なことです。むしろ、影が十度あとに戻るようになしてください。」20:11 預言者イザヤが主に祈ると、主はアハズの日時計におりた日

時計の影を十度あとに戻された。

ヒゼキヤはしるしを求めました。イザヤ書を読みますと、自分の父アハズに対して、イザヤが「しるしを求めなさい」と言っている場面があります（7章）。けれども、アハズはしるしを求めません、主を試みません、と答えています。霊的に聞こえますが、いいえ、アハズは主が何かを行なわれたら、自分がそれに関わらなければいけないから、主との関わりを持ちたくないのですんなことを言ったのです。しるしを求めることは、主への関心があることを表しています。

そして驚くことをヒゼキヤは求めました。なんと、日時計を十度戻すことを願いました。かつてヨシヤが、「日よ、とどまれ。月よ、とどまれ。」と言いましたが、同じ世界的、天文学的奇跡をヒゼキヤが願い、その願いが聞かれました。しかも、この日時計はアハズが作ったものです。アハズは主のしるしを拒んだのに対して、息子ヒゼキヤは積極的に求めました。

## 2 B バビロン捕囚 12 - 21

このような主の憐れみの業に対して、実はヒゼキヤは誠実に応答しませんでした。歴代誌第二を読みますと、「ところが、ヒゼキヤは、自分に与えられた恵みにしたがって報いようとせず、かえってその心を高ぶらせた。そこで、彼の上に、また、ユダとエルサレムの上に御怒りが下った。（32:25）」とあります。ユダの王で主の目にかなうことを行なったという評価を受けている者たちに、晩年に主から離れるという記録を私たちは読みましたが、残念ながらヒゼキヤも晩年に高ぶってしまいました。次に読む箇所は、そのことを表す一つの逸話です。

20:12 そのころ、バルアダンの子、バビロンの王メロダク・バルアダンは、使者を遣わし、手紙と贈り物をヒゼキヤに届けた。ヒゼキヤが病気だったことを聞いていたからである。20:13 ヒゼキヤは、彼らのことを聞いて、すべての宝庫、銀、金、香料、高価な油、武器庫、彼の宝物倉にあるすべての物を彼らに見せた。ヒゼキヤがその家の中、および国中で、彼らに見せなかった物は一つもなかった。

バビロンの王から使者が来ました。そして手紙と贈り物が来ています。この人物、メロダク・バルアダンは、当時、アッシリアの支配に抵抗していた気骨のバビロン独立運動の戦士であります。イスラエルとその周辺の国々が西側でアッシリアから独立すべく同盟などいろいろな動きを展開させていたように、東側で独立運動を展開させていました。

そしてヒゼキヤは、宝物をすべて使者に見せました。これは、自慢に他なりません。バビロンは、純粹に見舞いに来たものではありません。手紙も持っています。これからのアッシリアからの独立に、東と西がどのように協力するかというような目配せをしていたことは確かです。ヒゼキヤは主が救いだしてくださったのに、人との同盟を心の中で計らい、さらに自分が強いことを宝を見せることによって誇示していました。

20:14 そこで預言者イザヤが、ヒゼキヤ王のところに来て、彼に尋ねた。「あの人々は何を言いましたか。どこから来たのですか。」ヒゼキヤは答えた。「遠い国、バビロンから来たのです。」20:15 イザヤはまた言った。「彼らは、あなたの家で何を見たのですか。」ヒゼキヤは答えた。「私の家の中のすべての物を見ました。私の宝物倉の中で彼らに見せなかった物は一つもありません。」20:16 すると、イザヤはヒゼキヤに言った。「主のことは聞きなさい。20:17 見よ。あなたの家にある物、あなたの先祖たちが今日まで、たくわえてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日が来ている。何一つ残されまい、と主は仰せられます。20:18 また、あなたの生む、あなた自身の息子たちのうち、捕えられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者がある。」

イザヤは厳しい事実をヒゼキヤに伝えました。アッシリアに対抗している味方だと思っているこのバビロンが、まさに、ユダ国を滅ぼすために用いられる器になるということです。これが紀元前 586 年、115 年後辺りに起こります。そしてもう一つ、あなた自身の息子のうちに、バビロン王の宮殿で宦官になるものが出るということですが、これはダニエルとその三人の友人のことです。第一次バビロン捕囚、紀元前 605 年の時に起こりました。

20:19 ヒゼキヤはイザヤに言った。「あなたが告げてくれた主のことばはありがたい。」彼は、自分が生きている間は、平和で安全ではなからうか、と思ったからである。

これはとても残念なことです。自分自身は平和で安全、ということで後世のことを考えていませんでした。

20:20 ヒゼキヤのその他の業績、彼のすべての功績、彼が貯水池と水道を造り、町に水を引いたこと、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。20:21 こうして、ヒゼキヤは彼の先祖たちとともに眠り、その子マナセが代わって王となった。

ヒゼキヤの業績であまりにも有名なのが、ここにある「水道」です。アッシリアによってエルサレムが包囲される前に、城壁の外にあったギホンの泉を埋めて、地下に水道を掘って、その水を城壁の中のシロアムの池まで持ってきました。これは今でも残っており、イスラエルの旅行者はその中を 20 分ぐらいかけて歩くことができます。今でも水が流れています。このようにして、包囲されても生存に絶対不可欠の水の確保を行なったのです。

### **3 A 滅びの定め 2 1**

聖書の話、そしてイスラエルの歴史というのは、極めて興味深いというか、示唆の富む流れを持っています。それが次の話、マナセの治世です。ユダは、ヒゼキヤによってこれまでにない根本的な宗教改革を断行することができたのですが、その息子によってこれまでにない、根底を覆す背教が行われました。このマナセの悪行から、ユダの国はついに立ち直ることができず、そのまま、今イザヤが預言したようにバビロン捕囚に至らせます。

#### **1 B 先住民より悪い業 1 - 1 8**

#### **1 C 宮の中への持込 1 - 9**

21:1 マナセは十二歳で王となり、エルサレムで五十五年間、王であった。彼の母の名はヘフツイ・バハといった。21:2 彼は、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の忌みきらうべきならわしをまねて、主の目の前に悪を行なった。21:3 彼は、父ヒゼキヤが打ちこわした高き所を築き直し、バアルのために祭壇を立て、イスラエルの王アハブがしたようにアシェラ像を造り、天の万象を拝み、これに仕えた。

マナセが行ったことには、特異性があります。父ヒゼキヤが取り除いた高き所を築き直しました。そして、北イスラエルのアハブによってバアル信仰という背教を取り入れました。さらに、バビロン発祥の天の万象を拝むという行為も導入しました。

21:4 彼は、主がかつて、「エルサレムにわたしの名を置く。」と言われた主の宮に、祭壇を築いたのである。

21:5 こうして、彼は、主の宮の二つの庭に、天の万象のために祭壇を築いた。21:6 また、自分の子どもに火の中をくぐらせ、ト占をし、まじないをし、霊媒や口寄せをして、主の目の前に悪を行ない、主の怒りを引き起こした。21:7 さらに彼は、自分が造ったアシェラの彫像を宮に安置した。主はかつてこの宮について、ダビデとその子ソロモンに言われた。「わたしは、この宮に、そしてわたしがイスラエルの全部族の中から選んだエルサレムに、わたしの名をとこしえに置く。21:8 もし彼らが、わたしの命じたすべてのこと、わたしのしもべモーセが彼らに命じたすべての律法を、守り行ないさえするなら、わたしはもう二度と、彼らの先祖に与えた地から、イスラエルの足を迷い出させない。」

マナセが行ったことは、他のいかなるユダの王より、いやイスラエルの王を合わせても最も悪いことを行ないました。それは神の宮の中に、忌まわしい偶像を取り入れたことです。アハズは、確かにダマスコで見つけた祭壇を神殿に持ち込みました。けれども、そこでのいけにえはすべて神の律法に書いてあることを行なっていました。けれども、マナセは全くすべてその習わし通りのことを行なったのです。そしてイゼベルの娘アタルヤは、バアルの宮をユダに造りましたが、神殿は何の手も付けず、廃れたままにしていました。これら異教の習わしを神の宮、そして聖所の中で行ったということが、あまりもおぞましいことでありました。

エレミヤ書を読みますと、エルサレムがバビロンの虐殺行為の中で、その死体が転がるようになるという預言があります。19章ですが、その理由がエルサレムの住民が、ヒノムの谷で自分の子供たちをバアルのために全焼のいけにえとして捧げていたから、というものです。同じところで自分たちも惨殺されるのです。このヒノムの谷は、エルサレムの南と西に走っています。そこをヨシヤがその忌まわしいことをやめさせて、ごみの焼却所にします。それが後に、いつまでも火が上っているところとしての「ゲヘナ」と呼ばれるようになり、イエス様は消えることのない地獄の火として語られたのです。

21:9 しかし、彼らはこれに聞き従わず、マナセは彼らを迷わせて、主がイスラエル人の前で根絶やしにされた異邦人よりも、さらに悪いことを行なわせた。

ついにここまで落ちてしまったか、という感じです。カナン人やエモリ人が、忌まわしい行い以上のことを行ないました。しかしこれは神の民にとって現実です。コリントにある教会では、近親相姦の罪が一般の人々の中にもないほどの酷い形で、父の妻を自分の妻にしている者がいる、とパウロが指摘しています（1コリント 5:1）。一般社会以下に墮落し得るのです。

ちなみに、イザヤはマナセによって殉教したという言い伝えがあります。ヘブル書 11 章で、旧約時代に信仰によって生きた人々の記録がありますが、37 節に「のこぎりで引かれ」というものがあります。これはイザヤだ、という伝承があります。

## 2 C 北イスラエルの道 10 - 18

21:10 主は、そのしもべ預言者たちによって、次のように告げられた。21:11 「ユダの王マナセは、これらの忌みきらうべきことを、彼以前にいたエモリ人が行なったすべてのことよりもさらに悪いことを行ない、その偶像でユダにまで罪を犯させた。21:12 それゆえ、イスラエルの神、主は、こう仰せられる。見よ。わたしはエルサレムとユダにわざわいをもたらす。だれでもそれを聞く者は、二つの耳が鳴るであろう。21:13 わたしは、サマリヤに使った測りなわと、アハブの家に使ったおもりとをエルサレムの上に伸ばし、人が皿をめぐい、それをめぐって伏せるように、わたしはエルサレムをめぐい去ろう。21:14 わたしは、わたしのものである民の残りの者を捨て去り、彼らを敵の手に渡す。彼らはそのすべての敵のえじきとなり、奪い取られる。21:15 それは、彼らの先祖がエジプトを出た日から今日まで、わたしの目の前に悪を行ない、わたしの怒りを引き起こしたからである。」

ついに、私たちが前回読んだ、北イスラエルが滅んだその経緯が、南ユダにも及んだことを示しています。イスラエルの測り縄とアハブ家の重り、つまり神が裁いたその物差しが、ユダにもあてはめられることになる、ということです。そして、ヒゼキヤの時代にいた神を信じる残りの民もいなくなり、敵の手に渡されます。そして総まとめとして、出エジプトによって奴隷から解放されたけれども、ここで振り出しに戻ることを告げています。救われたはずなのに、また救われる前と同じ状態になるとは、本当に残念でならないことです。

歴代誌第二を読みますと、マナセは悔い改めます。そして偶像を一部取り除きますが、彼の行ったことのゆえにユダの人々はその罪の楽しみを味わってしまい、そこから離れなくなってしまいました。彼の孫ヨシヤが宗教改革を行いますが、もうすでに遅しです。人々は立ち上がれないほどになってしまったのです。

21:16 マナセは、ユダに罪を犯させ、主の目の前に悪を行なわせて、罪を犯したばかりでなく、罪のない者の血まで多量に流し、それがエルサレムの隅々に満ちるほどであった。21:17 マナセのその他の業績、彼の行なったすべての事、および彼の犯した罪、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。21:18 マナセは彼の先祖たちとともに眠り、その家の園、ウザの園に葬られた。彼の子アモンが代わって王となった。

マナセが生まれたことによって、このようになってしまいました。この子さえ生まれていなければ・・・などと考えて

しまうような人物です。そしてそれが文字通り、この子が生まれない可能性もあったのです。なぜなら、ヒゼキヤが十五年の寿命を延ばされて、その三年後にこの子が生まれたのです。主がなぜ、「あなたは必ず死ぬ、直らない。家の整理をしなさい。」と言われたのか、なんとなく推測ができるのです。

人の命というのは、神の定めがあります。主から与えられたものを全うすれば、それで命が取られても構わないのです。黙示録 11 章には、二人の証人がいて、1260 日預言を行ないましたが、彼らの証しが終わると、反キリストによって殺された、という記述はあります。主の働きをしている時は必ず守られますが、その働きと使命を全うすれば、主に取られても構わないのです。

けれども主は、ヒゼキヤを憐れんで寿命を延ばされました。主はご自分の意志として、許容されるというものがあります。それは望ましいことではないが、つよく願うと、その自由意思を敢えて無視してまで行かせない、という面があります。モアブの王バラクによって雇われたバラムがそうでした。彼は主に、「イスラエルを呪いに行ってはいけない」と言われたのに、金銀の欲しさに行きました。彼は主に尋ねているのですが、実はすでに行くことに決めているのです。主は、「この者たちがあなたを招きに来たのなら、立って彼らとともに行け。（民数 22:20）」と言われましたが、その後で怒りに燃えて、ろばの口を開いて語らせ、抜き身の御使いによって彼を殺そうとするところまで怒っておられました。主はそれでも許されて、彼がイスラエルについての預言させるところまで行われましたが、確かにそれはイスラエルについてのもっとも美しい神の約束の一つでした。しかし、彼はバラクに助言して、なんとモアブの女をイスラエルの宿営の中に送り込むことを助言したのです。

このような人間の性向を主はすでにご存知でした。ヒゼキヤが癒されてから、主への献身が少なくなり、高慢になることを主はご存じだったのでしょう。だからそのまま家の整理をさせるようにしておられたのかもしれない。けれども、もちろんダビデの子孫が残される必要があります。このような、人が罪を再び犯すことを知りながらも、それでも主は彼らが立ち返るところまで忍耐して待って、それまで懲らしめを与えることも余儀なくされることを覚悟して、その願いを聞くということがある、ということです。

ですから私たちは、今自分のしていることが神に許されている、ということが多いと思います。けれども、そのすべてが益になるとは限らない、ということをお覚えなければいけません。神は憐れんでくださり願いを聞かれても、私たちがその恩を忘れて罪を犯す可能性が高くなることも知っておられるのです。「すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません。私にはすべてのことが許されています。しかし、私はどんなことにも支配されはしません。（1コリント 6:12）」

## 2 B 繰り返す子 19 – 26

21:19 アモンは二十二歳で王となり、エルサレムで二年間、王であった。彼の母の名はメシュレメテといい、ヨテバの出のハルツの娘であった。21:20 彼は、その父マナセが行なったように、主の目の前に悪を行なった。21:21 彼は、父の歩んだすべての道に歩み、父が仕えた偶像に仕え、それらを拝み、21:22 彼の父祖の神、

主を捨てて、主の道に歩もうとはしなかった。21:23 アモンの家来たちは彼に謀反を起こし、その宮殿の中でこの王を殺した。21:24 しかし、民衆はアモン王に謀反を起こした者をみな打ち殺した。民衆はアモンの子ヨシヤを代わりに王とした。21:25 アモンの行なったその他の業績、それはユダの王たちの年代記の書に記されているではないか。21:26 人々は彼をウザの園にある彼の墓に葬った。彼の子ヨシヤが代わって王となった。

マナセの子アモンは、北イスラエルの王と同じような道をたどりました。つまり、短い治世であり、家来によって暗殺されます。けれども、民はその暗殺をよしとせず、その家来を殺します。イスラエルでよく起こっていたことでした。そして次に現れるのがヨシヤです。第二の宗教改革が彼を通して行われます。